

文献管理番号	掲載DB	PMID・医中ID	著者	文献表題	雑誌名(略称名)	出版年	巻、号、ページ	doi	文献種別(○:雑誌)	URL	重要度 ○:重要 ●:重要 ●:不要	抄録
305	Pubmed+医中誌	2016045341	Okada Yu, Yanagida Noriyuki, Sato Sakura, Ogawa Ayako, Ogura Kanako, Nagakura Kenichi, Emura Shigehito, Asami Tomoyuki, Uino Hiroshi, Manabe Tetsuharu, Ogura Kiyotake, Ikura Katsuhiko, Ebisawa Motohiro	アレルギーアレルギーに対する経口免疫療法開始の1年間の経過	Allergy International	2015	64巻(2号)192-193	10.1016/j.jall.2014.09.004		https://search.jama.or.jp/link/ui/2016045341	×	
306	医中誌	2006293562	Buyskoetzler Suna, Kardes Buelent, Gelinck Asl A, Dal Murat, Colakoglu Bahattin, Akkor Aykut, Erden Sacide	ヘーゼルナッツ加工工場における労働者はハシバミとナッツ感受性リスクを増大させるか?	Allergy International	2005	54巻(3号)469-472	10.2332/allergint.54.469		https://search.jama.or.jp/link/ui/2006293562	○	ヘーゼルナッツ加工工場労働者において、職業的接触によるヘーゼルナッツアレルギーへの曝露はハシバミ花粉とヘーゼルナッツ産物によるアレルギー反応の増強と関連している。ヘーゼルナッツ加工工場の労働者は、ヘーゼルナッツ加工工場の労働者308名を比較し、同年齢の138名を対照とした。全被験者にアンケートの記入を依頼し、3種のアレルギー皮膚テストを実施し、対象者に対するアレルギー検査の結果を比較した。アレルギー検査の結果に有意差は認められなかった。皮膚テストにより、カバノキ(Betula verrucosa)およびハシバミ(Corylus avellana)の花粉感受性が対照群よりも顕著であったことが示された。他の皮膚テストは全被験者に陽性であった。本研究により、ヘーゼルナッツの職業的曝露はハシバミおよびカバノキ花粉に対する皮膚過敏症の原因となることがアレルギー疾患に対するリスク増強とは無関係であることが示された。
307	医中誌	2006293560	Ito Komei, Morihata Masashi, Ohshima Mihoko, Sakamoto Tatsuo, Tanaka Akira	ピーナッツに対する免疫性抗体に關する交叉反応性抗原決定基	Allergy International	2005	54巻(3号)387-392	10.2332/allergint.54.387		https://search.jama.or.jp/link/ui/2006293560	○	日本ではピーナッツアレルギーの重要性について十分に認識されていないが、ピーナッツは臨床的ピーナッツアレルギーを有さない患者でも検出される。ピーナッツアレルギー患者149例(11-8歳の臨床的特徴を評価し、ピーナッツアレルギー検査および臨床経過をピーナッツアレルギー患者のサブグループに分類し、その結果、患者はアトピーキラーと診断に由来する可能性のある抗体を産生し、ピーナッツアレルギー患者の血清に由来するピーナッツに対する抗体は比較的低度のIgE抗体が認められたが、臨床的免疫性ピーナッツIgEは、ピーナッツと有意な相関関係を示した。抗ホースラディッシュ・ペルオキシダーゼ(HRP)と抗プロメラインIgE抗体は臨床的免疫性血清から検出されたが、ピーナッツアレルギー患者の血清からは検出されなかった。4つの臨床的免疫性ピーナッツIgE抗体のうち2つはHRPに由来する抗体と一致した。交叉反応性抗原決定基は免疫性ピーナッツIgE抗体に由来する抗体のサブグループの一つであることが示された。アレルギー診断の精度は、(1)アレルギーの診断精度を向上させること、(2)アレルギーに由来する抗体を産生していること、この点を証明することである。特異的抗体検査は(2)において有用な検査であるが、臨床診断にあたっては結果の解釈に注意が必要である。近年、アレルギーコンポーネントに関する研究が進み、コンポーネントを利用した診断はcomponent-resolved diagnostics(CRD)と呼ばれ、食物アレルギー診断における重要性を増している。最新のオムニコッド、小麦のω5グリコリン、ピーナッツのAra h 2、大豆のGly m 4など、既に検出されている抗体は臨床現場で広く利用されている。さらに、2023年には米国においてシューツのAra o 3、Ara h 1が新たに検出された。食物アレルギーの確定診断には抗原や抗体検査による感度向上の検証が必要となるが、測定精度と検査の信頼性を確保し、これらを上向きに活用することにより経口免疫療法の低減し、精度の高い診断が可能である。(著者抄録)
308	医中誌	2021196954	辻元 高亮, 高亮 良史, 伊藤 浩明	【日常診療にこの1冊!アレルギー診療のすべて】検査と管理 特異的抗体検査	Derna.	2021	3(07)9123-222			https://search.jama.or.jp/link/ui/2021196954	×	
309	医中誌	2018045978	原田 晋, 森山 達哉, 太田 隆雄	ピーナッツアレルギー、クルミアレルギーとの交叉反応の可能性も疑われたゴマによるアナフィラキシーの1例	Journal of Environmental Dermatology and Cutaneous Allergy	2017	11巻(5号)464			https://search.jama.or.jp/link/ui/2018045978	×	
310	医中誌	2017045029	松岡 温子, 野元 祐輔, 有村 雅幸, 馬場 藤子, 藤井 一哉, 東 裕子, 久留 光博, 丸山 芳一, 金屋 祐郎	アレルギーシンドロームアレルギーによる固定薬疹の1例	Journal of Environmental Dermatology and Cutaneous Allergy	2016	10巻(4号)403			https://search.jama.or.jp/link/ui/2017045029	×	
311	医中誌	2014257439	飯島 茂子, 角田 孝幸, 森山 達哉	クルミによる口腔アレルギー症候群の3例 クルミ抗原由来の検出	Journal of Environmental Dermatology and Cutaneous Allergy	2014	8巻(2号)95-102			https://search.jama.or.jp/link/ui/2014257439	×	クルミと摂取後に口腔アレルギー症候群を発症した6歳女児、31歳男性、4歳男児の3症例を報告する。3例とも花粉症の既往歴はなく、クルミの免疫学的反応性テストは2症、アレルギーテストは1症であった。患者血清を用いたエム・グロブリン法にて、3例ともIgEとIgGに陽性のバンドを検出した。今までに、わが国で報告された17例と診断を合せて20症例とまとめた。17例(85%)は口腔アレルギー症候群または口腔アレルギー症候群の状態で、そのうち9例はアナフィラキシー、1例はアナフィラキシーショックに進行した。残りの3例は、2例が口腔症候群のみアナフィラキシー、1例は食物依存性アレルギーアトピーキラーであった。診断例以外に併発のみイムノプロトタイプを行い、約90%のバンドを認めた。おそれられる検出したIgGはIgG transfer protein、クルミのIgGはIgG transfer protein、約21%のIgGは明らかでないが、レグミン糖蛋白の免疫性サブユニットではないかと推察した。(著者抄録)
312	医中誌	2011295728	平野 真紀子, 秀 透広	くるみによるoral allergy syndromeの1例	Journal of Environmental Dermatology and Cutaneous Allergy	2011	5巻(3号)299			https://search.jama.or.jp/link/ui/2011295728	×	
313	医中誌	2011059658	久留 光博, 内家 礼典, 岩谷 浩子, 大山 公明, 河井 一哉, 金屋 祐郎	5%マストース加乳糖リンゲル液(ボタコール)で誘発された蕁麻疹型薬疹の1例	Journal of Environmental Dermatology and Cutaneous Allergy	2010	4巻(5号)449			https://search.jama.or.jp/link/ui/2011059658	×	
314	医中誌	2011059822	花田 英樹, 藤野 祐英, 赤坂 俊仁	くるみによるoral allergy syndromeの4例	Journal of Environmental Dermatology and Cutaneous Allergy	2010	4巻(5号)429			https://search.jama.or.jp/link/ui/2011059822	×	
315	医中誌	2009287779	野島 佑知子, 藤本 和久, 山本 貴仁, 川名 誠司	くるみによるoral allergy syndromeの1例	Journal of Environmental Dermatology and Cutaneous Allergy	2009	3巻(3号)170-172			https://search.jama.or.jp/link/ui/2009287779	×	32歳男、23歳男と2歳男にくるみを摂取後、全身の皮膚と粘膜の腫脹が出現した。今回、くるみが入った焼き海苔を摂取した数日後に舌のしびれ感、口腔内の腫脹、咽頭の腫脹、全身の腫脹が出現した。くるみの免疫性IgE class 3があり、アレルギーテストでも陽性であった。(著者抄録)
316	医中誌	2009063359	藤原 崇子, 須又 直子, 前田 穂子, 橋野 賢樹, 竹 川 恵, 池澤 善郎	クルミによるアナフィラキシーショックの1例	Journal of Environmental Dermatology and Cutaneous Allergy	2008	2巻(4号)340			https://search.jama.or.jp/link/ui/2009063359	×	
317	医中誌	2008087831	飯島 茂子, 井上 知宏, 林 太智, 角田 孝幸, 森山 達哉	クルミによるoral allergy syndromeの3例	Journal of Environmental Dermatology and Cutaneous Allergy	2007	1巻(Suppl1)137			https://search.jama.or.jp/link/ui/2008087831	×	
318	医中誌	2008331014	清水 智治, 遠藤 善祐, 田村 英治, 山本 寛, 村田 聡, 東 良誠, 谷 敏	抗腫瘍によるアナフィラキシーショックの現状 アンケート調査の報告	Shock: 日本Shock学会誌	2007	22巻(1号)48			https://search.jama.or.jp/link/ui/2008331014	×	
319	医中誌	2021037498	斎藤 澤 光宏	アレルギー疾患における最新の話題 食物アレルギー	アレルギー	2020	(49号)15-17			https://search.jama.or.jp/link/ui/2021037498	×	
320	Pubmed+医中誌	2024086930	佐藤 さくら	「食物アレルギー診療ガイドライン2021」 ナッツアレルギーの診断・管理	アレルギー	2023	72巻(4号)338-342	10.15036/areng.72.338		https://search.jama.or.jp/link/ui/2024086930	○	
321	医中誌	2024063364	安戸 裕貴	種実類のアレルギーコンポーネント	アレルギー	2023	72巻(5号)448-452	10.15036/areng.72.448	○	https://search.jama.or.jp/link/ui/2024063364	○	種実類(食用とされる種子のうち、穀類と豆類以外のもの)アレルギーは欧米で増加傾向にあり、日本でも近年急増している。下記について概説した。1)種実類(堅果類、核果類、種子類)、2)日本における種実類のアレルギーの動向、3)アレルギーコンポーネント(Ac)、4)種子貯蔵蛋白、5)種実類ACを用いたcomponent-resolved-diagnostics(CRD)、6)多様な臨床場における種実類AC診断の応用、7)種実類アレルギーの誘発状況の予測、8)種実類アレルギーの合併の予測、9)種実類アレルギーの診断精度への応用について、として概説した。
322	医中誌	2024051942	本多 愛子, 今井 孝哉, 山下 恒雄, 大川 恵, 高木 俊哉, 橋上 千佳, 渡邊 俊, 岡田 裕樹, 前田 尚由, 神谷 太郎	食物経口負荷試験 重症クルミアレルギー患者に対する交差免疫寛容の検討	アレルギー	2023	72巻(45号)993			https://search.jama.or.jp/link/ui/2024051942	○	
323	医中誌	2024051773	丸山 伸之, Chen Bingyu, 高麗 美津, 今井 孝哉, 緒方 真佳, 石橋 誠二郎, 佐藤 さくら, 斎藤 澤 光宏	食物アレルギー クルミアレルギーにおけるVicin N末端フラグメントの診断的有用性の検討	アレルギー	2023	72巻(45号)875			https://search.jama.or.jp/link/ui/2024051773	○	
324	医中誌	2023327307	杉本 千恵子, 高橋 亨平, 佐藤 さくら, 柳田 紀之, 斎藤 澤 光宏	アレルギー 「食物アレルギーに関する食品表示に関する調査結果」令和2(2020)年即時型食物アレルギー全国モニタリング調査結果報告	アレルギー	2023	72巻(3号)1032-1037	10.15036/areng.72.1032		https://search.jama.or.jp/link/ui/2023327307	○	2020年における即時型食物アレルギー全国モニタリング調査結果を報告した。今回の調査では608例の即時型食物アレルギー症例が集計され、2017年調査(485例)に引き続き集計症例数は増加傾向にあった。また前回の調査に引き続き、クルミを主要な木の果物の即時型食物アレルギーの罹患率が増加していることが明らかになった。
325	医中誌	2023197197	飯本 光紀, 堀田 幸里, 中村 浩彦, 清水 敦一	クルミアレルギーにおける両側のクルミの摂取頻度との関係について	アレルギー	2023	72巻(1号)61			https://search.jama.or.jp/link/ui/2023197197	○	
326	医中誌	2022002371	沖崎 直子, 河合 奈香, 小林 久富実, 鶴田 和寿	アジア全域アレルギーコンポーネントMal d 10 ELISAによる品種別比較	アレルギー	2021	70巻(45号)866			https://search.jama.or.jp/link/ui/2022002371	×	
327	医中誌	2022002295	杉田 英, 森道 尚, 河野 透哉, 杉本 千恵子, 小原 尚実, 岡本 薫, 永谷 公宏, 中島 隆一, 斎藤 澤 光宏	食物アレルギー- 本邦におけるクルミとペカンナッツの交差免疫性の血清学的検討	アレルギー	2021	70巻(45号)827			https://search.jama.or.jp/link/ui/2022002295	○	
328	医中誌	2022002081	柳川 優樹, 永倉 剛一, 藤原 優子	食物アレルギー- 皮子 食物アレルギーによるアナフィラキシーによるクルミとの割合の12年間の経時的変化の検討	アレルギー	2021	70巻(45号)798			https://search.jama.or.jp/link/ui/2022002081	×	
329	医中誌	2021324993	山口 春江, 工藤 智恵子, 田中 佑規, 松原 裕彦, 齋藤 くるみ, 斎藤 澤 光宏	ICS/LABA/LAMA製剤の臨床的効果についての検討	アレルギー	2020	69巻(臨時増刊号)305			https://search.jama.or.jp/link/ui/2021324993	×	
330	医中誌	2021324924	田中 佑規, 工藤 智恵子, 松原 裕彦, 齋藤 くるみ, 山口 春江, 高橋 和貴	院内におけるアドレナリン自己注射薬の処方別および使用例に関する検討	アレルギー	2020	69巻(臨時増刊号)293			https://search.jama.or.jp/link/ui/2021324924	×	
331	医中誌	2021324667	Nishimoto Ayano, Narita Masami, Yoshida Kaichi, Hirao Keiko, Yokoyama Shoko	クルミアレルギーの予測因子 日本における後向き観察研究	アレルギー	2020	69巻(臨時増刊号)191			https://search.jama.or.jp/link/ui/2021324667	×	
332	医中誌	2021030817	木村 浩, 西野 正哉, 松下 貴史, 竹原 和郎	ImmunoCAP ISACが診断に有効であったナッツ類によるpollen-food allergy syndrome(PFAS)の1例	アレルギー	2020	69巻(3号)712			https://search.jama.or.jp/link/ui/2021030817	×	
333	医中誌	2021030810	安戸 裕貴	アレルギー用語解説シリーズ Ara o 3, Jug 1	アレルギー	2020	69巻(3号)706-707	10.15036/areng.69.706		https://search.jama.or.jp/link/ui/2021030810	○	
334	医中誌	2020210450	飯本 光紀, 永倉 剛一, 柳田 紀之, 佐藤 さくら, 斎藤 澤 光宏	少量経口免疫療法を実施した重症クルミアレルギーの3例	アレルギー	2020	69巻(1号)69-70			https://search.jama.or.jp/link/ui/2020210450	×	

494	英中誌	2006072710	角田 孝敏, 刈 真志, 加賀 早織	クルミによる即時型アレルギーの1例	日本皮膚アレルギー学会雑誌	2005	13巻(3号)125-128		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2006072710	×	症例は31歳男性,20歳からクルミを食べるたびにのどが痒く腫れ起こることが何回あった。今回はクルミを食べた後10分が口腔と喉頭に発赤と浮腫(口唇アレルギー様徴候)がみられ,念急に発赤と所に腫れみられ,持病のクラスタスと2,ヒーナツ,クルミと花粉症(ハンソウ)を疑念粉はのみあり,クルミとのアレルギーは4歳であった(腫毒疹)
495	英中誌	2007078953	野田 佑知子, 山西 貴仁, 藤本 和久, 川名 雅司	くるみによるOral Allergy Syndromeの1例	日本皮膚アレルギー学会総合・日本アレルギー学会総合合同学術大会プログラム・抄録集	2006	36回 - 31回(1)36		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2007078953	×	
496	英中誌	2022252525	宮内 一成, 藤井 一典, 宮崎 智子, 久保 龍樹, 野元 智樹, 金堀 祐郎	デュピルマブで顕化した蕁麻疹内症の1例	日本皮膚病性腫瘍学会学術大会プログラム・抄録集	2021	37回(1)59		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2022252525	×	
497	英中誌	2024260286	佐藤 さくら	ナッツ類アレルギー	日本皮膚科学会雑誌	2024	134巻(5号)1137		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2024260286	×	
498	英中誌	2023151470	森野 暢子, 島山 奈未, 庄田 紀子	薬剤性過敏症症候群(DHS)の経過中に進行性多形性自発紅斑(IPML)を発症した1例	日本皮膚科学会雑誌	2023	133巻(3号)502		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2023151470	×	
499	英中誌	2023006678	松崎 公輝美, 田中 敬子, 南 浩人, 三井 広	唇上皮膚アレルギーの1例	日本皮膚科学会雑誌	2022	132巻(11号)2541		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2023006678	×	
500	英中誌	2020240666	松崎 公輝美, 小中 英帆, 長谷部 涼, 大沼 毅樹, 佐野 傑也, 小川 隆一, 三井 広, 島田 眞路, 川村 貴子	重症性の経過でStevens-Johnson症候群様の全身性紅斑と口唇・口腔内びらんを呈した症例の1例	日本皮膚科学会雑誌	2020	130巻(1号)71		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2020240666	×	
501	英中誌	2010160268	久原 光博, 内宮 礼嗣, 岩谷 徳子, 大山 公康, 河井 一浩, 金澤 祐郎	5%ワセリンと保湿剤リソルマデ(ボタコール)で誘発された蕁麻疹型薬疹の1例	日本皮膚科学会雑誌	2010	129巻(3号)682		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2010160268	×	
502	英中誌	2007276631	安藤 典子, 宮原 恵子	Oral allergy syndrome(OAS)の4例	日本皮膚科学会雑誌	2007	117巻(8号)1333		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2007276631	×	
503	英中誌	2005281332	原田 晋, 吉崎 七海, 河野 由貴	スパイスアレルギーの1例	日本皮膚科学会雑誌	2005	115巻(9号)1368-1359		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2005281332	×	
504	英中誌	2004185472	中村 恵明, 本田 正徳, 谷口 裕子	ワサビ,クルミによるアナフィラキシーを伴ったラテックスアレルギーの1例	日本皮膚科学会雑誌	2004	114巻(3号)645		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2004185472	×	
505	英中誌	2003201264	長井 秀明, 玉生 淳子, 杉山 博子, 玉田 康彦, 松本 義也	Spiegel症候群に生じた蕁麻疹様血管炎の1例	日本皮膚科学会雑誌	2003	113巻(2号)186		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2003201264	×	
506	英中誌	2003007655	野尻 乃紀子, 佐藤 祐夫, 玉生 淳子, 橋本 邦, 玉田 康彦, 松本 義也, 野口 宏	慢性腎不全患者に発症したTENの1例	日本皮膚科学会雑誌	2002	112巻(7号)1014		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2003007655	×	
507	英中誌	1998011019	中島 知賢子, 他	顔面アレルギーの1例	日本皮膚科学会雑誌	1997	107巻(8号)1013		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.1998011019	×	
508	英中誌	2021052918	原田 晋, 森山 達雄, 太田 蘭穂	ビーナツやクルミとの交差反応が疑われたゴマによるアナフィラキシーの1例	日本皮膚病性アレルギー学会雑誌	2020	3巻(3号)456-463	10.18934/jpsca.3.3_456	https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2021052918	×	症例は20歳男性で、非菌性ブロッコリーのゴマ粕と蕁麻疹およびクルミ入り焼酎後のアナフィラキシー症状、アレナリン筋炎、ステロイド点薬などにより1日で症状は緩和した。2歳時より数回ビーナツ蕁麻疹にアナフィラキシー症状の既往があり、ビーナツ、ゴマ、クルミの特異的IgEおよびブロッコチンがすべて陽性であったため、ビーナツ、ゴマ、クルミによるアレルギーを併発していると考えた。ELISA試験では健康人と比較してビーナツで有意強いIgE結合を認め、ビーナツに対する強い陽性反応を示していると考えられた。両剤ELISA試験の結果から、ビーナツに対するIgE結合はクルミで阻害されなかったが、ゴマに対する結合はクルミで一部阻害されたため、クルミとゴマの間には交差反応性が存在している可能性がある。
509	英中誌	2023051306	松崎 公輝美, 南 浩人, 三井 広, 川村 龍貴, 田中 敬子	農耕器具に発症した唇上皮膚アレルギーの1例	日本皮膚病性アレルギー学会総合学術大会プログラム・抄録集	2022	52回(1)84		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2023051306	×	
510	英中誌	2024126886	伊藤 朝暉, 佐藤 祐, 前澤 翔, 玉生 淳子, 大澤 千博, 中本 梨沙, 政谷 眞, 織原 祥, 保津 修祐, 中西 貴夫, 竹内 祐, 末 孝太郎, 三島 悠平, 久我 隆俊, 藤原 利直, 村田 雅博	ゴマアレルギーの合併が疑われたクルミアレルギーの1例	日本病院総合診療医学会雑誌	2023	19巻(国増)1179		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2024126886	×	
511	英中誌	2022257671	関 奈未, 田中 伸典, 奥寺 康司, 阿部 真規, 田島 志郎, 功刀 しのぶ, 菅原 涼子, 松澤 昌, 福岡 剛也	過敏性肺炎における気道中心性肺線維化(ACF)の1例	日本呼吸学会雑誌	2022	111巻(1号)322		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2022257671	×	
512	英中誌	2021240375	関 奈未, 原田 俊介, 吉田 龍, 吉村 雅夫, ムンデルゲル・ジジュー, 福岡 剛也	Always centered interstitial fibrosis 病態による閉塞性肺病	日本呼吸学会雑誌	2021	110巻(1号)293		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2021240375	×	
513	英中誌	2020352393	関 文重, 神原 隆哉, 升田 一志, 片岡 志洋子, 水谷 健二, 田中 治, 小澤 光一, 谷 島 剛, 笠井 良次, 山崎 和男	中国産クルミ科植物(黒科)の毒の抗アレルギー作用について	日本薬学会年会要旨集	1995	115巻(2号)194		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2020352393	×	
514	英中誌	2004073779	田原 貴久, 橋本 博之, 遠藤 隆徳, 末良 良典, 阿部 元, 仲 成孝, 花澤 一宏, 谷 島 剛	ヨード高透射アレルギーを有したためMCTで下下にMCTにて凝固療法を施行した再発HCCの1例	日本臨床外科学会雑誌	2003	64巻(増刊)680		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2004073779	×	
515	英中誌	1991054721	東 真彦, 磯ノ上 正明, 船野 哲	食物アレルギーの1例	皮膚	1990	32巻(Suppl)842-49		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.1991054721	×	食物の接触による皮膚発疹6例と食物の摂取による蕁麻疹様紅斑を生じた2例と蕁麻疹のない血管腫を生じた1例(腫毒疹)としてトマト, レタス, サニーレタス, ニンジン, エビ, キウリ, ムスカタホウレンソウなどであった。手の接触後皮膚における接触として食物も摂取すべきことを認識した。また, 検査法についても疑った。食物の摂取により皮膚を生じた劇しい蕁麻疹としてクルミ, フロッキー, 苺の花があった。皮内反応やスクラッチテスト, ブリックテストで陽性のときやそれらを実験し陽性になる反応(陽性陰性)が認められた。
516	英中誌	2023028116	平井 由花, 鈴木 茉莉恵, 眞井 恵子, 荻原 朋康, 星橋 ゆりこ, 伊藤 雄夫, 中田 土紀文	アレルギー性慢性腎炎に合併した皮下結節性脂肪壊死症の1例	皮膚の科学	2022	21巻(3号)226-230	10.1134/skicaresearch.21.3_226	https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2023028116	×	27歳男性。近衛からアレルギー性慢性腎炎, 腎臓病にて内科に経過していたが蕁麻疹, 紅斑, 皮膚の腫れを繰り返していた。6週間前に右下肢に遅れて左下肢に紅斑が出現, 2週間後に右下肢も腫れを認めるようになった。両側下肢に示指腫れからクルミまでの硬結を伴う紅斑が散在性に多発し, 右下肢では腫れを認めた。臨床経過では炎症反応の軽微上昇とアレルギー・リパーゼの異常高値を認めた。病理組織学的には皮下脂肪組織の腫脹と腫瘍の慢性炎症, 壊死, ghost-like cellが認められた。以上の所見より皮下結節性脂肪壊死と診断した。皮膚は腫れの改善とともに消滅していった。本症の病態発症を伴ったこと, 両脚では慢性性腎炎, 全身で「腫」を認めた。合併する腎臓病は急性慢性腎炎, 慢性腎臓病で9割以上を占めていた。診断には皮膚の病理組織学的検討とリパーゼの測定が有用であった。臨床経過では61.7%で発疹が腎臓病に先行して認められていることから, 本症の診断を確定するためによって腎臓病より早期に開始することが可能になると考えられる。したがって, 炎症腫脹は腫れで解であるが, 本症は炎症に炎症におくべき疾患とすることができると。(腫毒疹)
517	英中誌	2013270980	黒口 崇徳, 亀井 利沙, 中井 大介, 松本 晋, 池上 隆夫	クルミによる食物依存性運動誘発アナフィラキシーの1例	皮膚の科学	2012	11巻(6号)554-555		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2013270980	×	
518	英中誌	2020134177	神崎 美穂, 黒田 わか	【腫毒疹・痒疹】バスターケンカレンバインの誤食によりアナフィラキシーを生じたナッツアレルギーの1例	皮膚科の臨床	2019	61巻(13号)1948-1949	10.18888/hi.0000001709	https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2020134177	×	症例は21歳男性で、小学生の頃、クルミを摂取後に口腔内の腫脹感、呼吸困難感、腫脹が出現し、クルミアレルギーを自覚していた。その後、カシューナッツでも同様の症状をきたすようになり、中学生以降クルミとカシューナッツの摂取を避けていた。2年前、バスターケンカレンバインとビーカンカレンバインとを食したところ、腫れより喉の違和感を自覚し、後発・田原の腫脹感、悪臭が出現した。翌日には自然軽快したが、後日検査のため当科を受診した。臨床経過と皮膚テストの結果から、クルミ、カシューナッツ、ピスタチオに対するアレルギーと診断した。バスターケンカレンバインには1個あたり2.2g(約1.5粒相当)のカシューナッツ粉末が使用されていたことが判明し、誤食によりアナフィラキシーをきたしたものと考えられた。
519	英中誌	2020034398	大原 晋子	くるみアレルギーの1例	皮膚科の臨床	2019	61巻(9号)1456-1457	10.18888/hi.0000001558	https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2020034398	×	1歳10ヶ月。発症。くるみ粉の指すを口食べた5分後から顔面の腫脹が出現したため、30分後に当科を受診となった。発疹、唇・舌の腫れと胃腸腫脹が特徴であり、臨床経過からクルミアレルギーによる血管腫と考え、ドクムルニエリシミン・レイン酸・ベタメタゾロン・ヒメタゾロン・レボセチジン塩酸塩シロップを内服させた。その結果、内服20分後には腫脹の腫脹が軽快傾向を示し、全身状態良好のため2週間を隔てて再診させた。尚、約2ヶ月後のブリックテストでは、くるみアレルギーの診断が確定した。
520	英中誌	2000035446	橋本 淳, 尾花 文郎, 林 一弘, 原田 晋, 堀川 達彦, 市橋 正光	クルミによるFood-Dependent Exercise-induced Anaphylaxis(FDEIA)の1例	皮膚科の臨床	1999	41巻(9号)1537-1539		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2000035446	×	
521	英中誌	1998032069	中島 知賢子, 青木 見佳子, 島崎 他	食物アレルギー - くるみアレルギーの1例	皮膚科の臨床	1997	39巻(9号)1355-1358		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.1998032069	×	くるみアレルギーの27歳男性, 3歳よりくるみを摂取後に口唇の腫脹, 発疹, 蕁麻疹が出現していた。悪化し市販の弁当を食べ30分後に吐瀉, 嘔吐, 下痢が出現した。弁当にくるみのあるものが入っており, ブリックテストで陽性反応を認めた同じくるみ食品に腫すべんかんでもブリックテストで陽性であった
522	英中誌	2015129084	久原 光博, 三好 逸男	【関節痛と皮膚疾患】急性汎発性慢性蕁麻疹症候群	皮膚病診療	2015	37巻(2号)123-126	10.2473/j.101768.2015.0129084	https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2015129084	×	<症例のポイント>心臓炎を合併する急性汎発性慢性蕁麻疹症候群(acute generalized pustular bacterid、以下、AGPB)を疑った。抗腫瘍投与で軽快したものの一部症状が遷延したため、副腎皮質ステロイド薬内服の併用と感染病巣と見られる口腔腫瘍の抽出で改善した。迅速腫瘍系に伴うAGPBでは、まれであるものの、心臓炎の併発に注意が必要である。(腫毒疹)
523	英中誌	2011213902	花田 美穂, 藤野 裕美, 赤坂 英夫	【皮膚病】IgEアレルギー<臨床例>クルミによるoral allergy syndrome	皮膚病診療	2011	33巻(5号)529-530		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2011213902	×	<症例のポイント>クルミによるoral allergy syndrome(OAS)でアナフィラキシーを呈した症例があった。ナッツ類の適切な抽出法を抽出するためには、皮膚アレルギーテスト, 臨床経過, 血液検査より総合的に診断が必要である。クルミアレルギーの患者ではペカンに類似した症状を伴う可能性があるが、ペカンに対する陽性反応は必要である。(腫毒疹)
524	英中誌	2009325932	山下 純宏, 廣本 敦子, 松永 紀子, 島山 奈子, 清水 秀樹	【蕁麻疹様皮膚疾患】臨床例 痒疹に伴う皮下結節性脂肪壊死症	皮膚病診療	2009	31巻(7号)835-838		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2009325932	×	82歳男性。患者は既往に糖尿病および圧傷を伴う紅斑が出現し、発疹となった。入院時、両下肢ならびに左手背, 右足趾に発赤・腫脹が認められ、指指腫れからクルミまでの硬結を認めた。皮膚の下に圧痛を伴う腫瘍が認められた。また、左手背の紅斑からの生検では皮下脂肪組織の線維性中核を中心に好中性球主体の炎症細胞浸潤が認められた。以上より、結節性脂肪壊死と診断する。患者は好酸球増加, 好酸球の増加, 炎症反応に類似し、発疹が出現した。そこで、両側好酸球の増大を伴う紅斑からの生検を行ったところ、皮下脂肪組織全体の好中性球炎症性浸潤, 脂肪細胞の壊死性浸潤が認められ、脂肪細胞内に糊状の脂肪塊を有し、無構造で壊滅したghost-like fat cellも認められた。更に血液検査では腫瘍の上昇, 造影CTでは腎臓腫瘍がみられ、痒疹に伴う結節性脂肪壊死と診断され、痒疹は末期のため対症療法とし、皮膚はメチルグルコサミンの内服を行い、一時改善したものの痒疹を悪化させ、腫瘍は継続的に増大し自然死となった。
525	英中誌	2009074404	安藤 典子, 島田 眞路	【腫毒疹とその特徴】臨床例 クルミによるoral allergy syndrome(OAS)	皮膚病診療	2009	31巻(1号)65-68		https://search.jamap.or.jp/link/doi/10.2009074404	×	

526	医中誌	2003026070	本間 玲子, 鈴木 村之, 越山 良子, 望月 剛, 米海 正輝, 松本 一彦	イムノクロマトグラフィによるメシル酸ナファモスタット特異的IgE抗体発現測定法の確立	臨床検査	2002	46巻(7号)799-803	10.11477/mf.1542959512	https://search.jama.or.jp/link/ui/2003026070	×	薬物アレルギーの診断法としてワザンの有効成分であるメシル酸ナファモスタット (NM)特異的IgE抗体発現測定法(ELISA)を確立し、測定してまたが結果を得る迄に数日を要し迅速性に欠けていた特異性検出を必要とせず簡便な特異的IgE抗体をELISAと同時に検出できるイムノクロマトキットを開発した。ELISAで検定した陽性と判定した試料を用いて、ELISAで検定したELISAと比較測定した。よく一致した結果が得られた。他の薬物アレルギーへの応用も可能であり、今後広く臨床での使用が期待された。
527	医中誌	2007318798	東海 公康, 川原 翔乃, 羽田 真保, 田嶋 祐一, 米川 元晴, 廣野 高明, 高橋 豊, 衣川 佳純, 沢田 博行	Phenobarbitalによるdrug-induced hypersensitivity syndrome(DHS)の4ヵ月症例	臨床小児医学	2007	59巻(45293)44		https://search.jama.or.jp/link/ui/2007318798	×	
528	医中誌	2022168124	明谷 真希, 神岡 雅沙, 塩田 浩司, 土屋 邦彦, 加藤 則人	当院にてブリンクテストを施行した小児ナッツアレルギーの6例	臨床皮膚科	2022	76巻(3号)201-206	10.11477/mf.1412206594	https://search.jama.or.jp/link/ui/2022168124	×	＜文献概要＞ 当院にて2015年1月～2019年4月にナッツアレルギーに対しブリンクテストを施行した小児6例について報告する。うち5例は口腔発疹試験を実施した。患者の内訳は男児例:女児例で年齢は1～14歳(中央値:5歳)。合併症はアトピー性皮膚炎4例、気管支喘息3例、アレルギー性鼻炎2例であった。ブリンクテスト陽性はピーナッツ3/4(75%)、カシューナッツ3/5(60%)、アーモンド2/2(33%)、マカドミアナッツ4/4(100%)、クルミ0/0(0%)、スズナッツ3/4(75%)、ヘーゼルナッツ3/3(33%)、ピーナッツナッツ1/1(100%)、ココナッツ1/2(50%)、ジャイアントコーン0/0(0%)、MOJ0/0(0%)、アジナッツ0/0(10%)、ブリンクテストの結果と血液特異的IgE抗体価は相関した。また6例すべてが複数のナッツにブリンクテストで陽性を示したため、症状を起したナッツを含め複数のナッツを精査することが大切である。ナッツ類への感作例では着目的に除去を指示するのではなく、血液特異的抗体価、ブリンクテスト反応を併し、経口発疹試験を実施することによって除去が必要と正しく判断することが大切である。
529	医中誌	2021205227	大原 香子	クルミとカシューナッツのアレルギーを示した1例	臨床皮膚科	2021	75巻(4号)291-294	10.11477/mf.1412206304	https://search.jama.or.jp/link/ui/2021205227	×	＜文献概要＞ 12歳、男児、アトピー性皮膚炎と気管支喘息をもち、これまでクルミとカシューナッツにアレルギー症状を起こしている。クルミ、ペカン、カシューナッツ、ピスタチオ、ピーナッツ、アーモンド、マカドミアナッツのブリンクテストはすべて陽性。特異的抗体はクルミとカシューナッツとAna a3が陽性であり、クルミとカシューナッツアレルギーと診断した。IgEとAna a3は重症度に関与するアレルギーコンポーネントであり、重症度の予測や治療法に比べ感作が強い。近接ナッツアレルギーが増加しクルミ、カシューナッツ、アーモンドが陽性であるが、重症度は低くアレルギー科から多く、皮膚科領域からは少なくクルミアレルギーの報告も限りのみである。自験例は成功から手に湿疹病変を繰り返し、経皮感作したと考えた。他のナッツ類のアレルギーについても、クルミのIgE、カシューナッツのAna a3と同様の検査が可能になり、皮膚科医でも診断が容易になることに期待する。
530	医中誌	2015004418	足立 厚子, 竹原 千尋, 指塚 千恵子, 佐々木 祥人, 千谷 奈穂, 上田 正彦	ナッツアレルギーの例におけるマイクロレ法を用いたアレルギーコンポーネントの検討	臨床皮膚科	2014	68巻(10号)762-769	10.11477/mf.1412104119	https://search.jama.or.jp/link/ui/2015004418	×	ナッツ類のアレルギーとナッツをすりつぶした液を用いたブリンクテスト陽性で診断したナッツアレルギー7例を鑑別した。原因となったナッツは全例が複数で、クルミが最も多く6例、カシューナッツ4例、アーモンド3例、ピーナッツ2例、ピスタチオ、ハマリの糖、五味、ゴマ、カ、各1名1例であった。口腔アレルギー症候群(oral allergy syndrome:OAS)から始まるものが5例、痒疹を伴うものが3例、顔面腫脹2例、呼吸困難や下痢など全身状態合併が4例で重症例が多かった。アレルギーコンポーネントマイクロレ法により4例は25アルギニン、75プロリン、115グルタミンなど野果蛋白質の関与が指摘され、1例のみハンシキ花粉との交叉による感作特異的IgE抗体(IgE)によるOASが疑われた。残り2例は原因の不明な陽性で、未知の抗原の関与が疑われた。6例は原因ナッツの摂取禁止のみで、症例からの交叉の例は原因ナッツ、果物および乳児の摂取禁止で発症しない(著者抄録)
531	医中誌	2006139052	新田 悠紀子, 小池 文美香, 大野 悠之, 奥田 容子, 近藤 泰輔, 黒木 のぞみ, 小林 慶子, 島田 義明, 池口 宏	Sweet病候群を伴ったアナフィラクトイド紫斑の1例	臨床皮膚科	2006	60巻(1号)16-19	10.11477/mf.1412100478	https://search.jama.or.jp/link/ui/2006139052	×	42歳男、顔面・四肢に皮疹が出現した後、発熱、下痢、腹痛を来した。発疹時、顔・四肢部に最大×最大×最大の隆起性で表面にびらん、浸食を伴った淡紫色紅斑を多数認めた。皮疹には本邦大の病院で多発し、致死性皮疹も報告していた。白血球16000/μl(CRP 21.4mg/dl)、HbA1c 10.04%と糖尿病で、薬物・血圧を認め、顔面皮疹の病態鑑別学所見で皮膚アレルギー性。真皮にびんじり好中粒の浸潤を認め、血管炎の像はなかった。腎臓を鑑別では真珠の腫小血管周囲に血栓を伴った好中粒とリンパ球の浸潤、出血、アフリッド実性を認め、腎臓病を認め、内視鏡では十二指腸潰瘍、膵炎、膵腫瘍を認め、腸管出血性大腸炎を認め、腎臓病を伴ったアナフィラクトイド紫斑と診断し、neutrophilic dermatosis of myeloproliferative disorders候群を呈するSweet病を併発したと考えた。プレドニゾン40mg/日により皮膚症状は軽快し、発疹、関節痛20mg/日で経過観察中である。
532	医中誌	2009198276	亀山 浩, 安達 玲子, 手島 玲子	【食物アレルギーの新たな進展】アレルギー検知法の新たな開発状況	臨床免疫・アレルギー科	2009	51巻(4号)363-370		https://search.jama.or.jp/link/ui/2009198276	×	